

平成31年度  
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人高知県文化財団	
施 設 名	高知県立美術館	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	8,626	(千円)
公 演 事 業	8,626	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	0	(千円)

# 1. 事業概要

## (1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2019 「大谷康子&イタマール・ゴラン デュオ・リサイタル」	5月17日	大谷康子(vl)、イタマール・ゴラン(pf)	目標値	250名
		高知県立美術館ホール		実績値	399名
2	高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル2019青木涼子「Nopera A01 葵日本初演」	11月3日	【出演者】 《能》 青木涼子／《指揮》 夏田昌和／《ヴァイオリン》 松岡麻衣子／《ヴィオラ》 般若佳子／《チェロ》 多井智紀／《フルート》 斎藤和志／《バスーン》 中川日出鷹／《クラリネット》 山根孝司／《打楽器》 池上英樹／《打楽器》 畑中明香	目標値	250名
		高知県立美術館能楽堂		実績値	347名
3	高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2019 「ピン・ポン」公演	11月30日	構成・演出：佐藤信 美術・演出：tupera tupera 振付・演出：竹屋啓子 音楽演奏：磯田収 舞台監督：山崎牧 照明：横原由祐 音響：島猛 衣装：STORE 出演：竹屋啓子、久保恒雄、光田圭亮	目標値	350名
		高知県立美術館ホール		実績値	556名
4	高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2019 「ピーピング・トム」新作ダンス公演「Moeder/マザー」	3月14日	コロナウイルス感染拡大防止のため中止	目標値	300名
		高知県立美術館ホール		実績値	関連企画106名
5	高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2019 「出前演劇教室」	3月4日、5日	コロナウイルス感染拡大防止のため中止	目標値	80名
		おおとよ小学校、上分小学校、新荘小学校		実績値	0名
6	高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2019 「出前クラシック教室」	1月30日、2月14日、17日、19日	アンサンブル・パレット(5名) 福田香苗(サクソフォン)、杉本成美(ピアノ)、中山園(トランペット)、川村陽華(ヴァイオリン)、岡林綾(フルート)	目標値	360名
		中川内小中学校、はりまや橋小学校、影野小学校、仁井田小学校、新荘小学校		実績値	170名





## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
<p>当館は、高知県における芸術文化の発信基地として、2005年に高知県立美術館ホール活性化計画を策定しており、3つの基本方針である(1)「地域の芸術文化の拠点として、世界に開かれた施設」、(2)「誰もがアート・リテラシーを育み、感性を高める事の出来る環境」、(3)「創造性にあふれた地域社会の創出」のもと、次の4つの事業目標 ①「世界とつながる創造的で質の高い芸術の提供」、②「新たな芸術の創造・発信」、③「芸術を通して子どもたちの想像力と創造性を育む」、④「高知県の生んだ芸術家の発掘・保存・紹介・発展に貢献」を掲げ、取り組んでいる。これに基づいた「高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル2019」を立ち上げ、助成対象外事業含む計8つの事業を令和元年度に実施した。助成対象の公演事業では、①として欧州のダンスシーンを牽引する「ピーピング・トム」公演を東京と共同招聘し、世界水準の作品の鑑賞機会に加えて、同カンパニーの特徴であるシニアキャストの現地採用に取り組むことで、地域の高齢者層の創造意欲や感性を高めることを目指した。②として「Noera A0I 葵」公演では、日本の伝統文化と現代音楽の融合による、新たな「能」の創造を追求した。③として「ピン・ポン」公演では、乳幼児も入場可能な親子向けの公演、そして「出前演劇教室」「出前クラシック教室」では、プロのアーティストが小中学校に出向く事業として、幼少期から良質の芸術に触れ感性を磨く機会を創出した。④として本県にゆかりのあるヴァイオリニスト「大谷康子&amp;イタマール・ゴラン(ピアノ)」のデュオ・リサイタルを行い、本県での活動の場を創出し、次代に継ぐ地域の若手音楽家へも好例を示せた。前記のうち「ピーピング・トム」と「出前演劇教室」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。</p> <p>助成対象外の「アーティスト・イン・レジデンス」では、従来の滞在制作ではなく、創作前のリサーチに特化した、②③④を横断的に取り組む事業を展開し、約1カ月に渡って高知特有の遍路文化・神楽・土着信仰にある音楽性やそれらを伝承してきた地域コミュニティの調査を、タイと日本から招いた計3名の異ジャンルのアーティストと行った。滞在中には小学校でのワークショップやトークも実施した。②と④に相当する「地域のアトリエ」では、美術館をアートの仕事場に捉えなおし、地域のアートの担い手である住民と共に、日常のある場所から物語を紡ぎだすアートプロジェクトの実践を、劇作家の石神夏希を講師に迎えワークショップとして行った。</p>
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
<p>助成対象となる「高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル2019」は2010年より毎年継続して開催し、上記の3つの基本方針を基に事業を行っている。(1)として企画した「ピーピング・トム」公演は、家族や老いをテーマにした作品性や、地域からシニアキャストを選出する試みが、高齢者の人口割合が全国2位の本県の客層にとって注目を高めていた。新型コロナウイルスの影響で中止となり、公演による効果の検証はできなかったものの直前に行った関連の無料映画上映会の客層から好評を期待させるものがあった。(2)として「Noera A0I 葵」公演では、県民にとってなじみの薄い日本の伝統芸能と現代音楽とを融合した作品の上演を通じて、両分野のアート・リテラシーの涵養及び知的好奇心の醸成を行った。(3)として「ピン・ポン」公演では、0歳から入場可とし、高知県内の未就学児童が初めて舞台芸術に触れる環境を整えられたことで、地域社会の次代を担う子供達の創造性と想像力の向上に繋がった。全体としては、子供から高齢者までのあらゆる世代が、ダンス、演劇、ジャンル横断的な作品という幅広い分野の舞台作品に参加・鑑賞する機会を創出できた。今回助成金の受託により、「ピン・ポン」で3歳以下無料、4歳～小学生500円という低廉なチケット代を設定でき、一人当たりの県民所得が全国37位と低い本県においても、多くの子供達が、家庭の経済状況に関わらず質の高い舞台公演を鑑賞する機会を設けられた。地域経済の実情に沿った弾力的な価格設定を行う上で助成金が大きな助けとなった。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

当館は、令和元年度「高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2019」として6つの事業を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、その内2事業が中止になった。

1. の「大谷康子&イタマール・ゴラン」デュオ・リサイタルでは、久しぶりの主催事業であるクラシックコンサートという事で、目標の入場者数を客席の62%にあたる250名を目標としていたが、高知にゆかりのあるアーティストである大谷康子を前面に押し出した広報活動が有効と考え、アーティストの協力を得て、新聞の取材やラジオ出演、知事への表敬訪問を行うなど積極的な広報活動を行ったことにより目標を大幅に上回る399名の完全満席となった。
2. の「Nopera A01 葵」公演では、伝統芸能と現代音楽の融合というあまりなじみのない分野の公演のため、入場者数の目標を250名としていたが、能声楽家で本公演を主演した青木涼子本人による事前の能レクチャーを行うなど事前に鑑賞者のアート・リテラシーを高める教育普及活動を行った結果、目標以上の347名となった。
3. の「ピン・ポン」公演は子供向け公演で家族での来場が見込まれたため、入場者数700名の目標を立て、関連企画の「ぼくとわたしとみんなの tupera tupera 絵本の世界展」の前宣伝にもなると考え、展示が始まる前に公演を行ったが、展示棟は吊り天井工事のために長期閉館していたため、展示棟での広報が充分に行えず入場者数は556名に留まったが好評だった。その反響もあり関連展覧会では16,026名の観覧者数となった。
4. の「ピーピング・トム」公演は、世田谷パブリックシアターと共同招聘する、海外カンパニーの公演となるため過去の実績を踏まえ、客席の75%にあたる300名の目標を立てていた。また事前にシニアキャスト募集や関連企画としてカンパニーのドキュメンタリー映像を上映し106名の入場者を集めるなど十分な普及活動を行い、前売券の販売も好調だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。
5. の「出前演劇教室」は、学校の下見も終え準備を終えていたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため学校閉鎖と重なり中止となった。
6. の「出前クラシック教室」は、30名×12回行い、360名の目標を立てていたが、令和元年度は出演者と学校とのスケジュール調整が難しかったため、7回の実施、170名の体験となった。

事業の効果を図る指標としては

1. の「大谷康子&イタマール・ゴラン」デュオ・リサイタルでは、「高知県民に芸術文化の豊かさ感じてもらい県民の意識の向上を図る」としていた。アンケートの集計の結果、大変良かったが82%になり、「深く深く心に響く演奏で感動！ありがとうございました。勇気が出ました」（60代、女性）といった声をいただくなど、多くの方に大変満足してもらえる公演を行うことができた。
2. の「Nopera A01 葵」では、「能楽堂の多様な使用方法や、新たな表現の公演を行い、舞台芸術の表現の可能性を広げる」ことを、指標としており、アンケートの集計の結果、大変良かった、良かったを合わせると83%になり、「まったく理解できないかと思っていましたが、公演当日にプレトークの助けもあって良く分かりました。ちょっと泣きそうになりました。またオリジナルの伝統的な能も観てみたいと思いました。ひとつひとつの要素が奇抜でありながら不思議に調和してひとつの作品として統合されているところがとても良かったです」（40代、女性）といった声をいただくなど、目指した目標を達成することができた。
3. の「ピン・ポン」では、小さい頃から舞台芸術に楽しむきっかけを作り新たな観客層を育む、という指標を立てた。アンケートの集計の結果、大変良かった、良かったを合わせて73%となり、「こどもが騒いでもゆっくり見られる雰囲気作りが良かったです。子どもにも良い経験になりました」（30代、女性）といった声をいただくなど、目標を達成することが出来た。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。  
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

当初計画と実績との相違としては、

1. 「大谷康子&イタマール・ゴラン」デュオ・リサイタルは、当初計画通り5月17日に開催。
2. 「Nopera A0I 葵」公演は、当初計画通り11月3日に開催。
3. 「ピン・ポン」公演は、当初R2年2月に開催を予定していたが、公演の美術・演出を担当したアーティストの展覧会(R2年1~3月)の前宣伝に公演を位置付けられることを理由に、公演日をR元年11月30日に変更。
4. 「ピーピング・トム」公演は、当初R2年3月15日に開催を予定していたが、関連企画にワークショップを計画する中で舞台面が必須となり、公演を3月14日、ワークショップを3月15日に変更したものの、コロナウイルス感染拡大防止のため中止。
5. 「出前演劇教室」は、当初R2年2月に開催を予定し、R2年3月4日、5日に決定したが、コロナウイルス感染拡大防止のため中止。
6. 「出前クラシック教室」は、当初R2年1月~2月に開催を予定し、計画通りR2年1月30日、2月14日、17日、19日に実施した。

5と6の出前事業に関しては、学校とアーティストとの日程調整において、学校側の日程を早くから確定する事が難しく、事業期間の変更はやむを得なかったと考えている。

事業費の面では、助成対象経費の予算額は28,092,000円だったが、決算額は15,767,937円となり、変更額12,324,063円、変更率-43.9%となった。減額の理由は、予算規模の大きい4をコロナウイルスで中止した影響が一番大きい。また収入に関しては、2,730,000円の予算に対し、1,694,000円となった。これはチケット料金を一番高く設定し(一般前売3,000円/当日3,500円)、105万円程度のチケット収入を見込んでいた4の公演中止が大きく影響した。事業期間、事業費の変更理由の多くはコロナウイルスの感染拡大防止のための中止に起因しており、変更は適切であったと考えられる。

1. は、他団体からの助成金が活用できたので、支出を抑えられた。
2. は、照明機材など大掛かりな演出を想定していたが、能舞台をより活かした演出がなされ経費が減額した。
3. は、当初単館招聘を予定していたが、近隣県のホールとのネットワーク事業として共同招聘できたので、旅費、宿泊費が当初予定よりもかからなかった。

事業ごとにみると、

4. 5. はコロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。
6. は出前の回数が少なくなったことで、減額となった。

高知県立美術館ホールは399席の小規模ホールであり、過去の事業実績から、公演のジャンルによって63%から88%の想定入場者数を設定している。

広報計画では、親子向けの公演では幼稚園や保育園でのチラシの配布、新しいジャンルの公演では、公演の内容を伝えるために教育普及活動を行った。また海外招聘公演では、ソーシャルメディア上に有料広告動画の配信を積極的に取り入れるなどして、公演ジャンルによって細かい広報計画を立てている。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当館は、当県で唯一可動式能舞台を有しており、主に能楽や神楽、日本舞踊等の日本の伝統芸能公演でこの舞台機構を活用してきた。「Nopera A01 葵」では、この舞台機構を用い、能と現代音楽を融合させた全く新しい「Nopera」というジャンルの新作を創作、日本初演した。当館の舞台機構と企画力を活かした、独自性のある公演となったと自負している。「ピーピング・トム」公演では、ベルギーを代表するダンスカンパニーの3年ぶりの来日公演を東京の世田谷パブリックシアターと共同招聘した。全国で2館のみ、西日本では当館だけの上演予定であったため、近畿・中四国地方を中心に、県外からも多くの観客が来場する見込みであった。「Nopera A01 葵」「ピーピング・トム」の両事業は、当館のディレクション方針と企画力を県内のみならず全国の舞台芸術関係者に再認していただけるラインナップであった。教育普及事業については、公演事業と関連性を持たせた普及事業と、アウトリーチ事業の2事業を継続して行っている。「ピーピング・トム」では、カンパニーがこれまで実施してきた公演への現地キャストの起用の社会的意義を伝えるドキュメンタリー映画の上映会を実施し、またコロナウイルス感染拡大防止のため結果的に中止になったが、ダンスワークショップも実施予定であった。「Nopera A01 葵」では、県民にとって馴染みの薄い能へのリテラシーを深めるため、公演に出演する能声楽家の青木涼子を招いて能のレクチャーを行った。アウトリーチ事業では、県内の小、中、特別支援学校に演奏家や俳優と出向き、ワークショップや公演を行っている。当県は太平洋に臨む、東西に長い海岸線と全国一の森林率を有しており、当館のある高知市中心部まで車で2、3時間かかるため足を運べない地域の住民も少なくない。こうした地理的困難を抱えた県の県立美術館として、当館に来られない県民が舞台芸術にアクセスする機会を作るため、「出前クラシック事業」を実施し、結果的に中止となったが「出前演劇教室」を計画した。

高知県立美術館は、館長をはじめホール事業担当者が、直接国内や海外の芸術祭や芸術見本市に積極的に出向き、国内、海外ネットワークの構築やマネジメントスキルの向上を図っている。平成19年4月に現館長が就任して以来、日本初公演となる「ピノキオ」（イギリス）や「ワン・アワー・スタンディング・フォー」、リキッド・ロフト「ランニング・スシ」（2つともオーストリア）ホテル・モダン「収容所」（オランダ）など外国のカンパニーの公演を成功させてきた。さらに2010年より「高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル」を立ち上げ、ストレンジ・フルーツ「スウォーン」（オーストラリア）、サダリ・ムーブメント・ラバトリー「ヴォイツェク」（韓国）、単独招聘としてマイケル・クラーク・カンパニー「カム・ビーン・アンド・ゴーン」（イギリス）、ジャコ・ヴァン・ドルマル監督&ミシェル・アンヌ・ドウ・メイ「キス&クライ」（ベルギー）公演などを行い、日本の地方公共劇場の中でも突出した活動を行ってきた。さらにホール事業担当者は、AIR事業を通じて築き上げた作品ペーパームーン・パペットシアター「和紙を透かして」（インドネシア）の新作公演、地域の住民とアーティストが協働して高知の未来のアートを共に考察する「地域のアトリエ」を行うなど、ここ数年で確実に事業を行う能力を高めてきている。

舞台技術担当者は開館以来、一貫して同じ舞台技術業者が担当しており、多年にわたる海外カンパニーの招聘公演の成功のは、その技術的経験値の蓄積が反映されたものであり、継続的に実施することで更に舞台技術者の能力も向上している。

四万十川国際音楽祭や演劇祭 KOCHI 等高知県内の優れた活動を支援し、共催事業への連携や、県内を中心に活躍する音楽家が本事業のために結成した「アンサンブル・パレット」を小中学校へ派遣し、学校という身近な場所で、楽器の仕組みなどを紹介しながら、本格的な演奏に触れる機会を作っている。

また可動式の能楽堂を持つホールとして、能楽堂を活かした「Nopera A01 葵」や神楽公演、高知県能楽協会との共催など多様な公演も行っている。



## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

県民調査で県民から県に寄せられた「厳しい環境にある子供たちへの支援」及び「文化・芸術を鑑賞・体験できる機会の創出」というニーズに県立美術館として応えるため、子供向けの演劇公演「ピン・ポン」では、0歳児から入場可能と設定し、3歳までは入場無料、4歳～小学生までは500円という、大胆な価格設定を行った。その他の公演でも学生料金を設定し、舞台芸術に関心のある若者が低廉な料金で鑑賞できる環境を整えている。また、「出前クラシック教室」、「出前演劇教室」（コロナウイルス感染拡大防止のため中止）を県内全域の小中学校で企画し、当館に足を運べない地域の子供達が舞台芸術に触れられる機会の創出を図った。

また、県民から寄せられた「高齢者がいつまでも元気に暮らせる地域づくり」「文化芸術活動を発表する機会の拡充」に対するニーズに応えるため、「ピーピング・トム」公演では劇中に出演する地元のシニアキャストを募集した。出演者も決まり、高知にて世界的なカンパニーの作品へ出演し、高いレベルの文化芸術活動を実践も出来る良い機会だったが、残念ながら、コロナウイルス感染拡大防止のため公演は中止となった。

ステークホルダーの「ホールの特性を生かした事業を実施し、美術館の魅力向上に努める」という要求に対しては、過去に、中庭での「雅歌」公演や外庭「スウォーン」公演などの美術館が持つ多様なスペースの活用や、能楽堂での「Nopera A01 葵」公演など、特性を使った美術館ホールならではの活動を行っている。また劇場と美術館の一体運営により、演劇、ダンス、映画、音楽、古典芸能、美術など様々な芸術の提供が可能となり、美術館の魅力向上に努めている。またホール事業担当職員がAIR事業を通じた作品では、これまでのホール事業で培ってきた、地域で活動するアーティストや伝統芸能の担い手や文化施設従事者とのネットワークを活かし、リサーチを介して地域に脈々と受け継がれてきた芸術文化、民俗芸能の再発見、再配信に努めた。地域のNPO団体や書店とも連携し、レジデンス事業に招いた作曲家によるトークを行い、活動紹介とレジデンス事業を通じたリサーチの目的をアーティスト自ら語る機会を創出した。さらに多彩な舞台芸術を共催し、地域の芸術文化活動の発展に貢献するなど美術館ホールが持っている資源を投入し県民の要望に応えた。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

2005年に「高知県立美術館ホール活性化計画」を立て、2010年から高知パフォーミング・アーツ・フェスティバルという形で発展させる中、海外からの単独招聘、共同招聘やAIR事業を通じた作品創造、国際共同製作等を行ってきた。今後も、国際共同製作やAIR事業を通じた作品創造、日本では招聘されていない海外の舞台作品の紹介を通じて、地域と日本全体の芸術文化の発展に貢献することとしている。

これらの事業を持続させるため、企画事業課には、30代から50代の計5名の世代の異なった、映画や舞台芸術を専門とする職員を配置して、幅広い視点から事業内容を考察、検証出来るようにしている。

また事業運営に関する人材の育成のために、ホール事業担当者は、文化庁や全国公立文化施設協会、(一財)地域創造が主催する講座や研修会に積極的に参加し、劇場スタッフとしての知識及び情報の入手や、他館とのネットワークを築いている。当館においても、文化庁委嘱事業中四国アートマネジメント研修会、トヨタアートマネジメント講座、国際交流基金文化事業連絡会、ステージラボ高知セッションの開催など積極的に人材育成に取り組んできている。

また国際舞台芸術ミーティング in 横浜 (TPAM) や国内の芸術祭のみならず、海外の芸術祭や芸術見本市に積極的に参加し、海外ネットワークの構築や、マネジメントスキルの向上を図っている。

本年は、当財団主催の自主企画研修制度を活用してトリノ・ダンツァ・フェスティバル (イタリア) を訪れ、ピーピング・トムの家族三部作「ファーザー」「マザー」「チャイルド」の一挙上演を中心に視察し、それらに出演する現地シニアキャストとの協働の取り組みについての考察を深め、将来的な企画の構想づくりに活かした。

近年はドイツ文化施設視察団への参加や、オーストラリア舞台芸術見本市 (ブリスベン、メルボルン)、フェスティバルトランスアメリカ (モントリオール)、カルフル国際舞台芸術祭 (ケベックシティ)、タレガ芸術祭 (スペイン)、モントリオール芸術祭、フィンランドの芸術見本市やダンスフェスティバルなどに数多く参加。また国際交流基金アジアセンターの次世代舞台芸術制作者等育成事業「Next Generation」、国際交流基金ソウル文化センターの若手舞台芸術関係者派遣事業に参加するなど、スタッフ一人一人の専門性の向上を図り、常に今回のような新作事業にチャレンジすることで組織全体の事業執行力の強化につなげている。

平均勤続年数は、今年度採用の職員を除く4人の平均勤続年数は約10年と長い年数になっている。また今年度採用された職員も30代であり、ホール実務経験者を採用し、事業担当者の実務能力を厚くしている。

ボランティア組織としてはカルチャーサポーター制度があり、美術館側と協力して活動している。また年数回事業を鑑賞するホール事業の研修制度があり、美術館ホールの事業を理解していただき、育成に努めている。

3年間の収支の推移は、平成29年度は総収入399,570千円、総支出399,570千円、収支差は0円

平成30年度は総収入373,420千円、総支出373,420千円、収支差は0円

令和元年度は総収入304,398千円、総支出304,398千円、収支差は0円

となり、この3年間は安定した経営を行っている。

設置者からの、5年間の管理代行料は1年目から5年目まで変化がなく、また寄付等はなく、文化庁、芸術文化振興基金、国際交流基金、(一財)地域創造などの助成金獲得を通じて経済的な自助努力を続けている。

劇場・音楽堂等間のネットワーク形成状況は、昨年度は、世田谷パブリックシアターと共同招聘するなど経費削減を図り、今後とも、横浜赤レンガ倉庫1号館、東京芸術劇場などと共同招聘を行う予定である。